

コンセプトは、「亀山社中」。 長崎は創薬に ふさわしい街です。

長崎大学医学部で「創薬」に取り組み多忙な日々を送っている池田先生は、医師、研究者、評論家など、医療分野で多彩な才能を発揮している方。広い見識と鋭い洞察力で、サラリとものごとの本質を言いあてます。そんな先生の魅力を、「創薬」に関するお話などを通してご紹介します。

長崎大学医学部 創薬科学

池田 正行 教授

Ikeda Masayuki

プロフィール

1956年、東京生まれ。1982年東京医科歯科大学卒業後、培養神経細胞の基礎研究者をはじめ内科一般臨床医、病理解剖医など、さまざまな職場を経験。2003年から4年間、医薬品医療機器総合機構で新薬を承認するための業務を担当。また、BSE評論家、知的障害・精神障害のソーシャルワーカーとしての顔も持つ。2008年10月から現職。内科専門医、アメリカ内科学会会員、神経内科専門医。自身のホームページでは医療問題について鋭い論評を展開している。
<http://square.umin.ac.jp/massie-tmd>

多くの人のつながりで成り立つ「創薬」

「創薬」という言葉は、一般には聞き慣れないものですが、その意味は文字通り「薬を創り出すこと」。そして池田先生のお仕事は、薬を創り出して、必要な人へ届けること、だと言います。「ひとつの新しい薬が世に出るために、たいへん多くの人々が関わっていることは、あまり知られていません。たとえば、薬のアイデアを出す人、研究室で薬を創る人、研究に必要な道具や機材を提供する人。そうしてできた薬は、治験（臨床試験）を通じて、何千人という被験者の協力を得てその効果や安全性が確かめられます。このとき、治験を行う病院などでは、看護師、薬剤師、臨床検査技師など多くの医療従事者が、被験者のサポートにあたります」。さらには、治験で出た結果を吟味する人、薬を製造して世に送り出す人など、いろいろな人と人のつながりから薬は生まれているのです。つまりネットワークと「ミニケーション」がうまく機能しなければならぬわけです。

「創薬」の全体像を見渡す希少な存在

池田先生はかつて、厚生労働省の機関であるPMDA（医薬品医療機器総合機構）の役人として、新薬承認審査を行う立場にありました。当時の業務は、膨

大かつこまごまとした治験のデータをみながら、その薬はどんな病気のどんな状態にある患者さんに、どれくらい用量を、いつ使ったらいいか、といったことを一つひとつ詰めていくという、ものすごくたいへんな作業でした。医事・薬事・行政をふんだ形で仕事が行われるPMDAでの豊富な経験を持つ池田先生は、治験の成り立ちなども十分理解し、「創薬」の全体像を見渡せる希少な存在です。その経験とノウハウは、2008年度のグローバルCOEに採択された本学の「熱帯病・新興感染症の地球規模統合制御戦略」本誌26号で紹介（の医薬品開発分野で、大いに活かされようとしています）。

1 PMDA

Pharmaceuticals and Medical Devices Agency の略。厚生省関連の独立行政法人。医薬品医療機器などの審査及び安全対策、並びに健康被害救済の業務を通して、日本、そして全世界の保健の向上をめざす機関。

活動のコンセプトは「亀山社中」

現在、大学内の各部署をはじめ病院、製薬会社、関係省庁などへ頻繁に出向き、学内外のネットワーク形成に力を注いでいる池田先生。

「ミニ」創薬のネットワーク、「ミニ」ニケーションは、関わる人の膨大さと内容の煩雑さから、そのイメージは漠然としてとらえにくいものがあります。それをひとことと言うとしたら「シンクタンク」で



長崎大学の治験管理センターのスタッフルーム。
CRC Clinical Research Coordinator: 治験コーディネーター たちが治験の被験者をサポートし、新薬の誕生を支えています。

[治験とは?]

新しい薬の効果と安全を十分に確かめるために行われる臨床試験のことです。薬の効き目や副作用、効果的な使い方について、第 Ⅰ相(患者さんでなく健康な人の協力を得て調べる)、第 Ⅱ相(100人くらいまでの患者さんの協力を得て調べる)、第 Ⅲ相(数百人から数千名の患者さんの協力を得て調べる)の3段階に分けて、慎重に調査が進められます。

病院では安心して治験に参加してもらうために、治験コーディネーターが在籍し、被験者のさまざまな相談に応じています。



「僕がいまやっていることは、表看板は薬というモノづくりですが、その本体は“人材育成”です。」



「コミュニケーションとネットワークというとき、言語化されたメッセージだけをとらえがちだけど、実は非言語性のメッセージが非常に重要。だから、僕は実際に会って話することに重きを置きます。」

すね。実際は、大学にも製薬会社にも立派な箱モノがありますが、事業自体は特定の空間や箱モノに規定されない活動でもあります。」

そして、その活動をわかりやすく言語化するならば、亀山社中、だと言います。幕末、坂本龍馬が新時代の到来を予感し、長崎で結成した日本初の総合商社で、風雲児・龍馬を象徴する言葉のひとつです。あのとき、龍馬がやったことはネットワーク形成で、カタチあるもので偉業を成し遂げたわけではありません。そういう目に見えないつながりを意味する「亀山社中」をコンセプトにした「創薬」の活動というのは、たぶん他にはないと思います。」

また、池田先生は、長崎は、創薬にふさわしい歴史的・文化的背景があると言います。「龍馬にしても、グラバーにしても何の縁もゆかりもなかったこの街で、ネットワークを組み立てて時代を動かしました。長崎にはよそ者が来て、自由なことをやらせてもらえる、そういう風土があります。それは、大きな魅力です。さらに、長崎大学には熱帯医学研究所があり、日本はもとより、海外にも広くネットワークを持つています。治験では、日本国内にない病気の薬を扱う場合や、国内で被験者が足りない場合など、海外の人にも協力してもらう場面がありますから、そのネットワークが使えるというのは重要なことなのです。」



専門を聞かれるのが嫌いな「あまのじゃく」

自ら「あまのじゃく」と称する池田先生に、医師としての専門を問うと、「特にありません」という答えが返ってきました。そうやってリッテルを貼るのは、カッパルイことだと思っているそうです。実際、池田先生はこれまで神経内科医、家庭医、基礎医学の研究者、病理解剖医などとしてさまざまな職場を経験しており、また知的障害・精神障害専門ソーシャルワーカー、BSEや薬事に関する評論家など、ひとつの専門には収まらないさまざまな側面を持っています。

それにしても、新しい環境や新しい分野に挑む際のモチベーションは何だったのでしょうか。「人への好奇心ですね。人間」という抽象的なものではなく、もっと身近な人々に対しての。あの人は何を考えているのか、なぜ、ああいう行動をするのか、といった好奇心が常に自分の底流にあると思います。」



広告の仕事に就きたかった高校時代

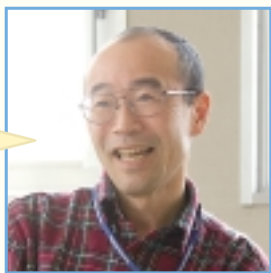
医師免許を自在に操るようになり多彩な活動をしてきた池田先生ですが、高校生の頃は、医者になる気は全くなかったそうです。「当時から僕は人の行動とかコミュニケーションに興味があり、広告・宣伝の仕事に就きたいと思っていました。医者



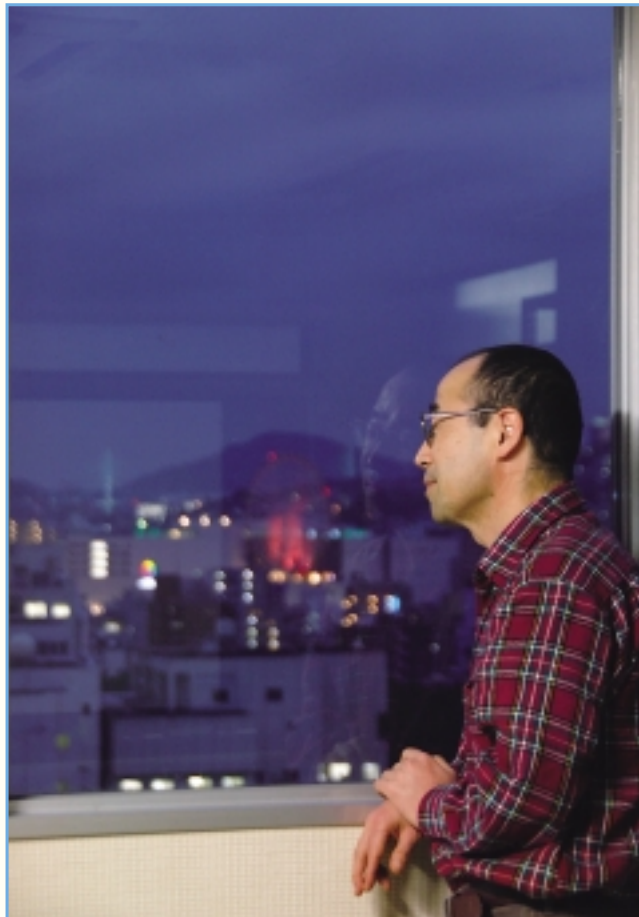
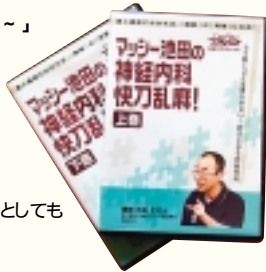
学生には普段から気軽に声をかけ雑談を楽しんでいる。この日のテーマは「非言語性コミュニケーションが得意な女性」について。刺激的で面白い話が次々に。



最近の愛読書
「こんな日本でよかったね〜構造主義的日本論〜」
(内田樹 著/バジリコ)



実は、神経内科医としても有名な先生です。



教授室の窓から、長崎の夜景を眺める池田先生。
「長崎には、人々が幸せに暮らしていけるノウハウがあるよね。」

池田先生は、長崎に来てまだほんの数カ月。この街や人々の印象について、「長崎は善男善女が多い。お人好し過ぎて、ずいぶん損をしていると思います。地元だけでやっている分には、それで完結できるのかもしれませんが、外ともネットワークを組まなければならぬ場合、ときにジレンマがあります。一方で、「このせち辛い世の中で、お金や地位といった見せかけの幸せではなく、本当に人々が気持ち良く生活している社会が長崎にはあると感じています」とも。池田先生は、そうした長崎の土地柄、人柄をそのまま活かし、外に対して変化を求める方法もあり、その方が効率的だと考えています。「いつも通用

長崎の土地柄、人柄を活かす

については、命を扱う恐ろしい仕事で自分にはできないと思っていました。当時、池田先生が思い描いていた将来像は、かなり具体的です。広告で人を動かすために、まず、大学の研究室で人間の行動を電子計算機を使って解析し研究する。その研究成果を大手広告代理店に就職して応用する。そこで経験を積んだ後、内閣広報室みたいなところに入って世論を動かす仕事をしたいなあと思っていました。それが、試しに受験した医学部に受かったことから医師の道へ進むことに広告とは全く分野は違うものの、人とコミュニケーションする仕事という点では変わりはないようです。

「ここまで、軽快にインタビューに応じてくださった池田先生ですが、読者である高校生に向けてメッセージをお願いします」というと、事前にまとめておいたというメモをやら取り出して読み上げました。「私の言うことを100%信用しないでください。そして100%否定しないでください。どこかの誰かが100%正しい答えを持っていると、けっして思わないでください。その時々で、いちばん適切だとあなたが思う答えは、あなたの頭の中にもありません。しかもその答えも、いまと1時間後では違います。悩むと迷うことを止めないでください。それを止めること、いつ慢になつてしまつ。不幸はそこから生じます。そのメモの中には、「あまのじゃく」を装いながらも、律儀で、もしかすると長崎人以上にお人好しな池田先生がいるようでした。

若いあなたへのメッセージ



するとは限りませんが、中央省庁とのさまたまなやりとりで、相手にその点を気付いてもらうことが、僕が長崎の中にある人間として、仕事ができることだと思っています。」